あべ やすし abeyasusi@gmail.com
http://hituzinosanpo.sakura.ne.jp/tabunka2019/

摩擦（まさつ）としての異文化コミュニケーション

価値観や習慣のちがいがあれば、摩擦がおきる。異文化は、いつもどこでも「心地よい」わけではない。しんどい、めんどくさい、わずらわしい、そのような否定的な感情をひきおこすこともある。そのとき、摩擦をさけるために接触をさけたり、自分の意見をいわずにだまったり、相手をだまらせたりすることがある。そのようにして、居心地のよさが担保される。安心をえる。「だれかを排除して、自分の安心をみつける」――ことばにすると印象がわるい。けれどもそれは、わたしたちが日常的にしていることではないだろうか。

「ここにいると、ほっとする」「いっしょにいると、安心する」――そのように感じるのは、そこに摩擦がないからだ。ひとりになると、ほっとする。摩擦をさけていけば、最後にはひとりになる。

ひとりになると「ほっとする」ことがあるのは、あたりまえのことである。それは否定すべきことでもない。摩擦はしんどい。それでも、だれも、ひとりだけでは生活できない。摩擦と安心の両面をいきていくしかない。

共存するということは、ときには摩擦がおきるということだ。ぶつかりあうということだ。「みんな仲よく」というのは幻想にすぎない。価値観は対立する。習慣はちがう。けんかにもなる。けれども、それでいいのではないか。

習慣や価値観、社会制度をめぐって意見が対立するとき、どちらかだけが一方的に非難されるような状況は、公平とはいえない。しかし、ただ両者が意見をぶつけあっているような状態であるなら、問題とはいえない。むしろ、歓迎すべきことではないか。

関係を固定することなく、異論をかかえたまま、摩擦をこわがることなく、自分の権利を主張し、そして、異論や対立する権利があるなかで、いかに「おりあいをつけていく」のか。模索することしかできない。

民主主義の社会、多文化社会はさわがしいのが当然である。もし、しずかな社会があるとすれば、それは異論が抑圧され、自分をだせずにいるからだ。

コミュニティの形成―似た者同士があつまる

「日本人」が海外に移住し、ブラジルやアメリカなどに「日本人街」（リトル トーキョー）を形成した。単に「同じ日本人」としての意識だけでなく、同郷ということから「県人会（Kenjinkai）」をつくり、コミュニティを形成している。「同じことば」「同じ文化」「同じ経験」を共有しているということには求心力があり、似た者同士があつまることになる。たとえばブラジルで発行されている日本語新聞『サンパウロ新聞』のサイトには「特集紙面」の一つに「県人会」がある（http://saopauloshimbun.com/category/kenjinkai/）。

現代社会はグローバル化しているといわれ、じっさいに、たとえば情報のアクセスは「いつでも」「どこにいても」が実現しているといえる。世界の情報にアクセスできる。しかし、じっさいはどうか。マーガレット・ヘファーナンはつぎのように指摘している。

> なによりもオンラインでは、住んでいる場所に関係なく、世界中の人に会える。しかし我々はいま、歴史上でもっとも多くの情報にアクセスできるというのは事実だが、ほとんどの人はそれを利用していない。我々は新聞と同じように、ブログを読む際にも自分が同意できるものを読む。しかも事実上無限に反響室がある。ブログの85パーセントは同じ政治的傾向を持った他のブログにリンクしている（ヘファーナン2011:33）。

ウェブ上では、さまざまな固まり（コミュニティ）を見いだすことができる。そこには、似た者同士の同化作用と、他者への異化作用がはたらいている。親近感でつくられたコミュニティが、ときとして他者への攻撃的な態度をうみだすことがある。安心できるコミュニティの外は「危険」だと認識してしまうのである。

人間の行動には、そのような傾向があるということを認識したうえで、他者への態度をふりかえり、敵意や偏見のまなざしをむけるのではなく、想像力をはたらかせることが必要であるといえるだろう。人は、閉じこもった空間のなかだけでは生きてはいけない。すべての人が「脅威は外にある」という認識をもちつづけていれば戦争がなくなることはない。それでは、どのように関係をむすびなおすことができるのだろうか。

「文化がちがうから」？―文化還元主義の問題

いわゆる「国民」（文化的／民族的多数派）は、「外国人」や「異民族」との間で摩擦や衝突が生じたとき、「文化がちがうから」「宗教がちがうから」などといって納得してしまうことがある。そのとき、「文化のちがい」というものを「決定的なもの」のようにとらえてしまっている。そして、接触自体をさけようとしたり、相手を一方的に非難したりすることがある。それだけにとどまらず、外国人嫌悪や排外主義を正当化し、強化してしまう場合もある。

多文化社会における摩擦や衝突を「文化のちがい」のせいにするのは「文化還元主義」である。摩擦や衝突の背景にある社会、政治、経済的な要素を無視している。

もちろん、文化のちがいによる誤解や衝突もあるだろう。しかし、それだけではないはずだ。複雑な現実を単純化してしまえば、わかりやすいかもしれない。けれどもそれは現実をみているのではなく、自分の固定観念を相手に投影しているだけである。

社会問題について議論するとき、問題のありかをマイノリティや社会的弱者のせいにすることを、「スケープゴート化」という。根本的な問題から目をそらして、だれかを悪者にしたてあげることである。文化還元主義とスケープゴート化をつづけるかぎり、社会の多数派は自分の特権的地位を維持することができる。自分たちの責任を棚上げすることができる。しかし、それでいいのだろうか。

世界観を更新する

社会問題や差別について議論するとき、きまり文句のように「偏見をもつのはよくない」という。先入観をもっていたことに気づいて「反省した」という。しかし、人それぞれに世界観があり、知識がある。そして、しらないことがある。だれもが、なんらかの偏見や先入観をもっている。表現をかえれば、それは「世界観」や「経験則」である。

重要なのは、さまざまな他者と交流していくなかで、自分の世界観や知識、あるいは価値観を更新しつづけることができるかどうかである。

「日本人」って、だれのこと？

「日本人」について言及するとき、それがどのような意味の「日本人」なのか、あまり意識することがない。その「日本人」とは、国籍をさすのか。民族性をさすのか。文化か。言語か。血液か。居住地か。たいていの場合、そのどれでもない。すべてをうやむやにした「日本人」がイメージされている。なかには、日本人というカテゴリーに「ふつう」という、さらにあいまいな表現をくわえることがある。

「ふつうの日本人」

「日本人」があいまいな概念であるように「日本文化」というのも、あいまいな概念である。それは「国民の文化」なのか、「民族の文化」なのか。アイヌ文化や沖縄の文化をふくめるのか、ふくめないのか。日本文化としてイメージされているもののなかには、大陸（中国やインド）を起源とするものがある。そのような「外来の文化」は日本文化なのか。「外来の文化」というものをそぎおとしていけば、「純粋の固有の文化」というものが発見できるのか。

文化はすべて、交流の産物である。人はたえず移動してきたし、これからも移動しつづける。外来と土着という概念は不毛な対立にすぎない。純粋という概念は「異物」を認識したときに、事後的に認識されるものにすぎない。異物なしには純粋という概念が成立しないということだ。

そもそも、国境線を文化の境界線としてとらえることに問題はないのか。西川長夫（にしかわ・ながお）の議論をみてみよう。

> フランス文化や日本文化の存在に疑問をいだくということは、文化の問題を「民族」や「国民」のレベルで切り取ることについて疑問をいだくことである。より一般的な形で「国民文化」への疑問と言いかえてよいであろう。多民族国家の例を引くまでもなく、「国民」は一般に雑多な文化を担う集団の集まりであるから、「国民」がある単一な文化の基礎的な集団でありえないことは誰の目にも明らかだろう。ある人間が××人と呼ばれるのは、その国の国籍を有することが唯一の条件であって、その人物の文化的な内容は問われない。またベネディクト・アンダーソンがいみじくも定義したように「国民とはイメージとして心に描かれた想像の政治的共同体」であって、心に描きだされたような「国民」が現実に存在するわけではない。

　では「民族」であれば文化の基礎的な集団となりうるであろうか。一般に民族は文化の母胎であると考えられている。だが「民族」は「国民」以上に曖昧な概念である。「国民」にはその容器ともいうべき国家があり、領域を区切る国境があるが、「民族」の境界を定めるものは想像力以外に何もない（にしかわ2001:286）。

「外国人」に「日本文化」を紹介するというとき、日常生活には登場しないものをもちだすのは、なぜだろうか。キモノ、茶道、歌舞伎などをもちだすのは、どうしてなのか。
異文化に接するのはたのしい。「めずらしい」からだ。ちがうものは新鮮だからだ。しかし、その「ちがい」をプレゼンテーションしようとして自分たちの日常から「とおい」ものをもちだすのは、文化を「博物館に陳列されるもの」のようにとらえる態度である。
人間は、それぞれちがう。そして同時に、それほどちがってはいない。共通点はいくらでも発見できる。それだけのことだ。ありのままの日常生活に文化があり、ちがいがある。人間は文化や伝統の継承者であるだけでなく、文化をつくる主体である。「いきる」ということが、人間の生活が、さまざまな文化をかたちづくっている。
文化を比較しようとするとき、便宜的に集団をおおざっぱに色わけし、分類し、文化をぞれぞれ記述する。それは便宜的な記述にすぎないし、その人の視点、その人の世界観にすぎない。しかし、その分類や記述を固定化したり、絶対視したり、その「色わけ」を「敵と味方」の境界線にしてしまうことがある。
なんのために文化をかたるのか。文化を比較する目的はなんなのか。おおざっぱな議論は、異論を抑圧してしまう。

「日本人はふつう、このようにする。」

このような想定が、多様な価値観を抑圧してしまう。文化論は、きめつける行為でもある。福岡安則（ふくおか・やすのり）は、『在日韓国・朝鮮人』でつぎのように「単一民族」という幻想を批判している。

> …日本は同質的社会だという言説には、日本は同質的社会であるべきだという価値観がセットになっている。事実認識のよそおいをもって価値判断が語られるとき、無意識裡（むいしきり）の不寛容がはたらきやすい。そこに問題がある（ふくおか1993:15）。

「日本人はふつう、このようにする」という主張には、「日本人は、このようにふるまうべきだ」という価値判断がこめられている。

ナショナリズムとはなにか

第1回のプリントで、食文化について注目しながら、文化とは「こだわり」であると指摘した。人間は、さまざまなことにこだわりをもっている。そのこだわりが、摩擦をうみだすこともある。『ナショナリズム入門』で植村和秀（うえむら・かずひで）は「ナショナリズムとはこだわり」であると指摘し、つぎのように説明している。

> …ナショナリズムという言葉には、争いのイメージがつきまといます。自分たちは正しい。われわれの敵は悪い。敵をこらしめよう、やっつけよう。そのような叫び声が群衆から響き渡る。こういった印象が呼び起こされるように思うのです。そして、そのような群衆の中に紛れ込んだ、そのことに関心のない人間は、どうにも居心地が悪くなります。それは、他の人たちとこだわりを共有できないからです。
> 　ナショナリズムとは、ネイションへの肯定的なこだわりに他なりません。…後略…（うえむら2014:11）

それではネイションとはなにか。植村は「ネイションを表現する便利な日本語がない」と指摘し、つぎのように説明している。

> …ネイションの日本語訳としては、国家、国民、民族といったものが考えられます。国家としてのネイションにこだわる考え方であれば、国家主義と翻訳するのが適切ですし、国民なら国民主義、民族なら民族主義という対応関係が成立していきます。ネイションのエッセンスへのこだわりなら、国粋主義という日本語訳も可能です。多義的なネイションのどれか一面に肯定的なこだわりを持つと、その一面に応じて訳語も変わるわけです。
> 　ただし、ここで問題なのは、一面のみにこだわることは極めて困難である、ということです。国家主義でもあり国民主義でもある、さらには民族主義でもある。または、国民主義だけれど民族主義ではないが国家主義と言えなくもない、といった組み合わせが考えられるのです。…後略…（12-13ページ）

植村は「ネイションとは、土地を持ち、歴史的に形成され、ネイションとして広く強く認知されたものである」と定義している（141ページ）。
ナショナリズムは、国や民族を単位にして、「われわれ」意識をもつものである。そのとき、外部の人間（外国人）は他者化される。問題なのは、その「外部」とは、いまここでいっしょに生活している人たちでもあるということだ。
その国の国籍法によって、住民の国籍が左右する。つまり、その地で生まれていても、外国人として規定される場合もあれば、その地で生まれたというだけで、その国の国籍をえる人もいる。
国籍法という制度にも、ナショナリズムが反映されているといえるだろう。つまり、「かんたんには、われわれの仲間には入れない」という意識があるからこそ、日本では血統主義の国籍法がとられているのである。
逆にいえば、そういった意識が緩和されれば、出生地主義の国籍法に改正されるだろうということだ。

今日におけるナショナリズムの問題は、「領土の外にいる「かれら」」と「われわれ」の関係にとどまらず、ともに生活している「わたしたち」のなかに、制度によって区分があり、差別があるということである。そしてさらに、自分たちが他者化した「だれか」を態度や発言によって差別していることがあるということである。
もうひとつ重要な点は、日本国籍の人たちのなかにも、民族的多様性があるということである。日本社会においては、言語的・民族的マイノリティは、自分たちの言語や文化を生活のなかで実践し、継承していくことが困難な状況にある。
現在、多文化共生がさまざまな場でスローガンとして語られている。しかし、そこでの共生とは、日本人と外国人の共生を模索するという内容であることがほとんどである。岡本雅享（おかもと・まさたか）が『日本の民族差別』で指摘しているように、「「外国人との多文化共生」ではなく、日本国籍者の中にもいるさまざまな民族の共存という観点で捉えていかなければ、多文化共生が目指す課題すらも達成できないのではないか」ということである（おかもと2005:7）。

敵対心をうみだす集団意識

社会心理学を専門とする小坂井敏晶（こざかい・としあき）は、ナショナリズムについてつぎのように解説している。

> 民族対立や民族紛争に言及される際、複数の民族の間にある相容れない利害関係や、信仰上の相違、文化的内容の差異などという与件がまずあり、そのために民族の平和共存が難しいのだと理解されやすい。しかし…中略…、固定した同一性を出発点として民族を考えること自体がすでに誤っている。また、集団の対立は必ずしも現実の利害関係や文化の違いがあるために生ずるとは限らない。
> 社会心理学における実証研究は、二つの集団の間に利害対立がまったくない場合でも、範疇化が起きるだけで、自らが属する集団を優遇し、他の集団の構成員を差別する傾向を明らかにする。例えば、硬貨を投げて裏が出るか表が出るかによって無作為に選ばれた半数の被験者を「紅組」と名付け、残りの半数を「白組」と呼ぶだけで、各被験者は自らが属する組をひいきする（こざかい2011:36）。

つまり、「範疇化自体が差別行動を生む」ということだ（38ページ）。それなら、カテゴリー化、線ひきをしなければよいのか。しかし「我々はみな社会的な存在であり、民族・宗教・職業・性別といった範疇から完全には自由になれない」（39ページ）。
また、個人のレベルでカテゴリー化をやめることができるわけでもない。じっさいに、「国民」と「外国人」との間に「国の制度による線」がひかれているとき、その線を「なかったことにする」ことはできない。もちろん、国籍による差別をなくすことで「線をひくことの問題」を解決することはできる。しかしそれは長期的な課題であって、突然実現できることではない。国内だけの課題ではなく、世界全体の課題でもある。国境線や入国管理局、軍隊などが現にあるかぎり、「かれらと、われわれ」という意識を完全になくすことは困難だろう。
それなら、自由になれないから、しかたがないのか。そうではない。そのようなカテゴリー化のメカニズムを理解し、その問題点を把握していれば、なにか感情的な対立が生じたときに、状況を冷静に判断できるようになる。
小坂井の主張にしたがうなら、線ひきによって生じた対立によって、文化のちがいが「発見される」ということも、十分にありうる。あるいは、積極的に差異化するということもあるだろう。相手が「線のむこう側」にいると見なすからこそ、ちがいをつよく感じるということがありうるわけである。逆にいえば、線の内側は同質だと感じてしまうことになる。

このような問題を考えてみると、なるほど「文化」という概念は、あやうさをはらんでいるといえる。いいかえるなら、文化の問題は、きわめて政治的であるということだ。

他者を「親日」／「反日」で二分することの危険性

マスメディアにおいても、日常会話やウェブ上の書きこみにおいても、他国やその国民を「親日」であるとか「反日」と呼びならわすことが広く一般化している。とくに、「反日」と見なした相手に強い敵対心、警戒心をもっている様子が観察できる。このように他者を「敵味方」で二分するような態度は、一方的な被害者意識による先制攻撃を呼びおこす危険性がある。

「反日」という語が定着し、なじんでしまうと、「反日」というメガネを通してしか相手を見ることができなくなる。実態に即した認識ではなく、想像上の他者に対して攻撃をしはじめる。自分の敵意を相手に投影しはじめる。それは記号化された他者でしかない。

ナショナリズムをこえて

人と人とのあいだには、「おなじところ」「ちがうところ」「にているところ」がある。そのどれに注目するかによって、同一性を強調したり、ちがいを強調したりする（同化と差異化）。

人が「文化」をかたるとき、しばしば内部の同一性を強調し、外部の異質性を強調してしまう。そのような議論は同化主義的で排外主義的な文化論である。「グローバルな共生」という視点から多文化社会を論じるのであれば、ナショナリズムをこえた文化論がもとめられる。それはつまり、境界線を絶対視しない、固定的にとらえないということだ。

そこで第一に、文化を相対的にとらえることが必要である。そして第二に、人権など、文化以外の視点をとりいれる必要がある。その両方が重要なのだ。どちらか一方だけでは不十分である。

文化を相対的にとらえるということは、「別の世界は可能だ」という認識にたつということである。人権の視点をとりいれるのは、「よりよい世界を想像する」ということだ。

文化という概念は、意義ぶかいところもあり、危険なところもある。「文化」という視点がコミュニケーションをひらくものになるのか、とじるものになるのか。それは、わたしたち次第である。文化という概念は手段であって、目的ではない。「多文化社会」という認識にたって、どのような世界を展望するのか。そのさきに、どのような将来像をむすぶことができるのか。それはつまり、「わたしはどのような社会で生活したいか」ということだ。

参考文献

植村和秀（うえむら・かずひで） 2014 『ナショナリズム入門』講談社現代新書
岡本雅享（おかもと・まさたか）編 2005 『日本の民族差別―人種差別撤廃条約からみた課題』明石書店
亀井伸孝（かめい・のぶたか） 2015 「「文化が違うから分ければよい」のか―アパルトヘイトと差異の承認の政治」
http://kamei.aacore.jp/synodos20150225-j.html
小坂井敏晶（こざかい・としあき） 2011 『増補 民族という虚構』ちくま学芸文庫
杉本良夫（すぎもと・よしお）／ロマス・モア 1995 『日本人論の方程式』ちくま学芸文庫
スチュアート、ヘンリ 2002 『民族幻想論―あいまいな民族 つくられた人種』解放出版社
西川長夫（にしかわ・ながお） 2001 『増補 国境の越え方―国民国家論序説』平凡社ライブラリー
日本移民学会編 2018 『日本人と海外移住』明石書店
福岡安則（ふくおか・やすのり） 1993 『在日韓国・朝鮮人』中公新書
ヘファーナン、マーガレット 仁木めぐみ訳 2011 『見て見ぬふりをする社会』河出書房新社
馬渕仁（まぶち・ひとし） 2002 『「異文化理解」のディスコース―文化本質主義の落とし穴』京都大学学術出版会

ポイント解説：社会心理学のすすめ

文化のちがいは、たしかにある。人間の行動は文化の影響をうけている。その一方で、傾向として、ある状況におかれたときに人がとる行動というものは、文化のちがいをとわず、それほどちがうわけでもないということが心理学の研究によってあきらかにされている。ヘファーナン『見て見ぬふりをする社会』は社会心理学の入門書としても活用できる。

コメントの紹介

日本史を思い返してみると、戦国時代では外国から来る人を「南蛮人」（南から来た野蛮な人）、江戸時代では、ある地域から来た外国の人を「紅毛人」（赤い毛の人）と読んでいたことがある。このことも、日本人を普遍的なものとして規範とし、外国の人の髪の色や性格を比較し特殊と判断した結果なんだろうと思いました。童話の『みにくいアヒルの子』や昔話の『泣いた赤鬼』なども特殊からなる差別をテーマにしたものだと思います。このような歴史や物語からも昔から差別は問題視されていたことを強く感じました。今もまだ差別がありますが、まず人々がその問題に興味を持つ必要があると思います。社会制度は一定の決まったものであり、特に多くの人に合わせたものになる傾向があります。だからこそ、人々の意識が社会環境を変えるために必要であると思います。少しでも興味を多くの人が持つというきっかけにも、過去の事例は役に立つと思いました。…後略…

———

多数派には名前がないと聞いてとても納得しました。多くの人は異性愛者であるにもかかわらず、自分のことを異性愛者であると言われ少し思考が停止しました。きちんと考えてみると異性愛者という言葉の意味がわかるのですが、自分のことを言われている気がしませんでした。…後略…

———

…私は社会福祉学部なので、今まで社会的弱者、障害者など、マイノリティの人々の話をたくさん聞いてきたけれど、いつも“健常者”とか“周りの一般人”と言って自分の立場を意識することはありませんでした。なので、今日の授業で“異性愛者”と聞いた時に、すぐには自分のこおだと気がつかず、話を聞いているうちに、“あ、自分のことなんだ！”と…後略…

———

小学生の頃、私の幼なじみで黒いランドセルを使っていた女の子がいました。最近では様々な色のランドセルがあるので、性別ごとにこの色という意識は薄れつつあると思うのですが、私が小学校に入学した頃はまだまだ男の子＝黒や青、女の子＝赤やピンクというイメージがかなり強かったので「なんで黒なの？」「女なのに黒って変！」と言われたり、上の学年の子がわざわざ教室まで来てその子をからかったりしていました。また別の幼なじみの女の子は茶色のランドセルを使っていて、その子も「何で？」と言われていました。学校の規則で色までは指定されておらず、ルール違反をしているわけではないのになぜからかわれたり変だと言われなければならないのか当時は分かりませんでした。…後略…

———

…知り合いの友達に高い声で背も低く、かわいらしい顔の男の子がいて、女の子のように扱われていた人がいました。その子は内心、男の子と扱われたいと思っていると聞き、どうしても見た目、第一印象に流されやすいけれど、多くの見方から、様々な人々と関わることが大切だと感じました。

———

「女は生まれるのではなくて作られるものだ。」というボーボワールの言葉がある。女性性というのは形成された社会の中で生きながら、自分の女性としてのアイデンティティが定義されるということだ。「女子力」という単語はたとえば料理が上手だったり、夫をよく補助する能力の高い女性を言う。問題は主張が強かったり暮らしに上手くない女性たちを白い目で見ることだ。生物的に定義される性別だけでなく社会的に作られる女性について考える必要がある。

———

…僕の妹は野球をやっていて、女の子が野球チームで銭湯に行ったときに、一人の女の子が髪が短かったので、呼び止められたという話を聞きました。この話を聞いたときに、日本の男＝短髪、女＝長髪という概念は間違っているのではないかと思いました。／LGBTに関して、今クール土曜日に日本テレビで放送されている『俺のスカートどこいった』というドラマでも取り上げられているのでオススメです。

———

人間の実態と社会の制度との間にずれがあるということがよくわかりました。セクシャルマイノリティーについて以前違う授業で、「書類を書く際に男か女かマルをつけるのが苦痛だ」とトランスジェンダーの方が言っていたのを思い出しました。自分にとって何気ないことでも違う人にとっては苦痛に感じたり、傷ついたりする事があるのだなと気づきました。何かのサイトに会員登録をしたり、大学受験をしたり、様々な場面で男か女かマルをつけることがあるけれど、いったい何の意味があるのだろうと疑問に思いました。このような無駄な差別（区別）から無くしていくべきだと思いました。

———

…アンケートや何かの登録など、いろんな場面で「性別」を記入する欄を見かけるが、最近は「男・女・その他」のように、2つに分けないものも見かけるので、性別に対する社会の認識が変わってきたのかな？と思う。

————

…私自身もあまり男性に恋愛感情を持ったことがない。それを考えたときもあったが、誰を愛そうと、誰を愛さなくとも、自分であることに違いはない。それも個性だと自分自身で考えている。

———

…わたしはアセクシャルです。恋バナを楽しんだり恋愛ものの映画やドラマ、雑誌の恋愛特集、いろんな娯楽が恋愛でうめつくされているのをみると、時々「あなたにこの世界が十分に楽しめるわけないでしょう？」と言われている気分になる。わたしはこんなに幸せなのに！

———

異性に対して恋愛感情を寄せて、性的欲求を感じる性的指向をもつ人を異性愛者、恋愛・性愛の対象が異性と同性の両方に向かう人は両性愛者、恋愛・性愛において相手の性別を考えない人は全性愛者、異性や同性に恋愛感情を持つが性的な欲求を感じることが全くない人は無性愛者というらしいが、気持ちのままに行動しているだけなのに、こんな風にかた苦しい名前がついているのは、とても窮屈に感じました。…後略…

【あべのコメント：名前というのは、両義的なもので、いい面もあります。よくわからない「もやもや」に、「名前があったのか！」「自分だけじゃなかったんだ！」という発見は、おおきいです。名前で他者とつながれる。コミュニティができる。「名前」については、その人の自称を尊重することが大事です。】

———

…私は多分バイセクシュアルだと自覚しています。好きになった人が好き、という考え方なので、そこに性別は関係ないからです。しかし、改めてバイセクシュアルであると自己紹介するのは少し違和感があります。自分の性質が普通でないからといって、名称を付けられてカテゴライズされるのはなんか奇妙だな、と思います。確かにものに名前がついていると便利ではあるけど、個人的には存在しない方が良かったんじゃないかというものの名前はけっこうあります。例えば、「八方美人」を良くない意味で使う人がけっこういますが、誰にでも人当たりよくできるのはすばらしいことだと思います。嫌な人にでも、ふてくされた態度とるよりずっとマシなのに、それを悪く言う人がいるのが理解できないです。「偽善者」とかも、目的がなんであれ、良い事をしたのに変わりはないのに…と思います。

———

LGBTの話に関連して、私の母はよく「ゲイの友だち欲しい」と言います。なぜときくと、自分が女だけど彼女たちよりも劣っているところをしかってほしいからと言っていました。でも、これって彼女たちが生まれたときから体つきが女でないことを下に見ているような気がするんです。加えて、ゲイの方々がみんなそうやって女性たちをしかってくれるという偏見でもあると思います。

【あべのコメント：そういう身勝手な期待、想定を「オリエンタリズム」といいます。あと、性的指向と性自認は別のものです。ゲイは性的指向が同性にむかう人のことを意味することばで、性自認は男性です。もちろん、性自認が明確な人もいれば、そうでない人もいます。「ゆらぎがあるのが当然」だと説明したように。】

———

…以前、ディスカッションの授業で先生が、「君の親友がゲイやレズビアンだったらどうする？」という質問をしてきたときにクラスの子の一人が「別に良いけど前ほど仲良くしなくなると思う」と言っていたのがショックで、今だに「それって上から目線だし認めてる風だけど差別だよ」と思います。…後略…

【あべのコメント：その教員の質問も、その場には異性愛者しかいないかのように決めつけていますね。よくない。】

———

…『Xメン』シリーズではないが、超能力を持ったキャラが出てくる映画では、人助けをして支持されたキャラが、メディアによって少しでも悪い所を広められると、マイノリティであるため、よけいに注目されてしまい、手のひらがえしで叩かれているので、差別がおこるのは、メディアなどの情報発信のせいであるともいえる。

———

…私は利き手が左なのでその面で少数派なんですが、右利きの人には体験できない不自由なことが多々あります。よく字が汚いとバカにされるのですが、左利きだと手で字が隠れてしまって字のバランスがとりづらかったり、ボールペンのインクがでにくかったりなど、字を上手く書くのにとても不利で、自分なりに上手く書こうと頑張っているのですが、バカにされる度に悲しい気持ちになります。

———

…日本でも同性愛の人同士の結婚を認める法律ができたりと、少しずつ受け入れられているように思い込んでいましたが…後略…

【あべのコメント：同性間の結婚を認める法律は日本にはありません。できてません。法律と条例はちがいます。そして、一部の自治体が制定したパートナーシップ条例には、法律（結婚は異性間に限定）をくつがえす力はありません。】

———

私は高校の修学旅行でニュージーランドに行きました。そこで、WETAスタジオという、映画『ロード・オブ・ザ・リング』などを製作したCGなどの先端技術を利用している映画スタジオを訪問しました。そこのスタジオには、35の国や地域を超える場所からクリエイターが集まるそうです。そこで案内してくれた人は、ここでは「ダイバーシティ」を大切にしていると言っていました。CGキャラクターを製作する際には、背がとても高い人や逆にとっても低い人など、身体に特徴がある人が必要になり、その場所には目に見えて「統一感のない」人が集まるそうです。そしてやはり、人と違う見た目の彼らは過去に「ふつうではない」と言われ、傷を付いたことがある人もいるそうです。しかし、このスタジオに来ると彼らは皆、自分に自信をもち、お互いを映画製作において大切なクリエイターとして尊重し合っていると言っていました。彼らの力もあり、映画産業はNZではとても大きな産業です。マイノリティを差別し、追いやるより多文化を尊重する方が、より良いものができる、そこにいるすべての人がそう考えているその空間こそ、理想的なものなのかなと思いました。

———

…私は助産師を目指しているので、『コウノドリ』をはじめ、産婦人科についての漫画やドラマをたくさん見てきました。産婦人科の話を読んだり見たりしていると、すごく考えさせられることがよくあります。その中の1つが出生前診断についてです。技術の進歩によって、簡単に診断ができるようになり、検査を受ける人が増えているようです。そして、赤ちゃんがダウン症だという結果が出ると、堕ろす人がほとんどで、そのことが問題になっています。産まれてくる前に病気かどうかを検査して、病気だと分かったら堕ろす、という行為が命の選別であり、倫理的に問題があると批判されているみたいです。たしかにそのような意見も理解できますが、私は出生前診断を命の選別だと言って、診断を受けた全ての親を責めるのは間違っていると思います。通常、親は子よりも先に死んでしまいます。ダウン症などの障がいを持つ子を持った場合、親が死んだ後はだれがその子の面倒を見るのか、などの問題があるからです。しかし、出生前診断が普及したことによって、実際にダウン症の方が減少し、ダウン症の方がさらに生きにくくなってしまっているのも事実です。さらに、どんな理由があったとしても、ダウン症だから堕ろしたのであって、命の選別だと言われてしまうのも無理ないと思います。このようにいくら考えても出生前診断が良いとか悪いとか一概には言えません。助産師を目指す上でこれからもずっと考えることになるのだろうな、と思います。

【あべのコメント：わたしは京都の障害者団体に所属していて、介助者として仕事しています。障害があれば、親が一生つきそうものだという考えがこれまで一般的でした。ですが、わたしたちの団体は「支援をうけながら自立する」ことを障害当事者に呼びかけ、相談をうけつけ、自立までのサポートをし、日々の介助者を派遣するとりくみをしています。そういった障害者自身による活動を自立生活運動といいます。／どんなことも、家族だけが背負うものではないです。】

———

…ドイツ語の辞典で“学生”を引くと“der Student”と最初に書かれており、その女性形はその後ろに（- in）と書かれています。その他の単語も男性形を変化させて女性形を作ります。男性主体なのかなと思ってしまいます。…後略…

———

対立、暴力、紛争などについて考えるヒント

■音楽
Jean-Jacques Goldman 「Né en 17 à Leidenstadt」
Cara Dillon 「There were Roses」
中島みゆき 「4.2.3.」

■映画
『ホテル ルワンダ』メディアをつかった憎悪扇動がもたらしたもの。
『レッドダスト』南アフリカにおける「真実和解委員会」のとりくみについて。
『フルメタル ジャケット』
『アクト・オブ・キリング』『ルック・オブ・サイレンス』
『麦の穂をゆらす風』
『クラッシュ』
『ディス・イズ・イングランド』
『青い鳥』いじめとは何であり、どのような問題なのか。どのように向きあうのか。原作は重松清。